

子どもの発達と音楽教育（表現） —— 児童の権利の法制史的研究に関連して ——

新井規夫

（平成6年9月30日受理）

A study of a child's development and a music education (expression) — In connecting with a study of the rights of child and law by a historical approach —

Norio ARAI

(Received September 30, 1994)

はじめに

小学校学習指導要領が平成元年3月に告示され、音楽科の教科目標は「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽性の基礎を養うとともに音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育て、豊かな情操を養う。」と示されている。

従来の教科目標の「音楽性」を「音楽性の基礎」と改め、「音楽に対する感性」を新たに加えたことに大きな特徴がある。以上のような改訂に基づき「音楽に対する感性」を育てるためには自己表現活動を通してどのように指導して行くか考えて見ることにした。

表現の内容としては、①歌唱、②器楽、③創造的活動の三分野がありこの中の「歌唱」について考察してみることにした。

1. 音楽の意義

子どもの発達段階の中で音楽がどのように与えられ受入れているのだろうか。音楽とは、何なんだろう。少し考えてみよう。一般によく云われる様にごく単純に音を楽しむと云う。これも一理あります。音楽の本質について色々発表されているが音楽の本質が完全に説明するようなものはない。ここでは少しでも音楽の特性について考えてみると、①時間性、音楽はよく「時間芸術」といわれるが、演劇、舞踊とは異なり、常に時間の流れの中にあり、音の響きは、それ自体が時間形式である。

②感覚性、音楽における音は、人間の感覚に直接訴えるものである。そのため音楽を聴き楽しむことができる。これが娯楽音楽の中心的意味をなしている。③感情性、音楽は人間の感情面を強く刺激し様々な興奮状態を起す児童学科音楽第1研究室

要素がある。いくつか音楽の特性についてのべたが他にも特性はいくつか考えられる。

2. 表現

表現すると云うことは、「歌唱」「器楽」「鑑賞」等を通して心に思ったり感じたことを、音や、言葉、身ぶり、表情、動作等を媒介にして、他の人にわかるように伝え表すことが表現である。

3. 歌唱表現内容

歌唱は、音楽学習の中心であって、歌うことの喜びが音楽の最も主要なねらいになるが、音楽的感性を育てる音楽学習の基礎を作るものである。

漠然と歌うのではなく、音楽的な意味のある表現にさせる。歌うことも、会話も速さの点では異なるが表現しようとする意味の感知や、その理解から生まれる点では同じだと云う。(シュトゥンプ (Stumpt.) のことばであるが、音楽は子どもが「遊び」とともに取り組むことが出来る教材であり、教師が技術によって、子どもを動かす前に、子ども自身が自分からうたいたいくなるような状況をつくって上げることが必要である。

表現の根底には、子どもたちの音楽に対する興味、関心、意欲などが備わらなければならない。又音楽に対する内面的な共感、子どもたちのよろこびがあるかどうかということである。

発声を例にとってみても最初は「技巧で育てるよりも、子どもたちの自然の声を音楽の喜びと共に育てることで」とハンガリーの指揮者チャーニー氏がいつている。我が国では、音楽の指導要領に「自然の声」の必要性が書かれてはいるが、同時に「頭声発声」の必要性が中学年

になるとことばとして出てくる。音楽表現には技術が必要であるが、しかし、技術指導が優先するような学習指導計画を作成してはならない。発声の技術が先行していくと、技術優先的な面がおこりかねない。子どもを自然に育てることを基本にして、技巧を考えることではないだろうか。子どもはひとりひとり、独自の肉体をもち個性をもっているのと同様、自然の声をもっている。それを早くから技巧で指導して育てようとするのは、子どもの自然発声の成長をさまたげてしまう。

音楽は、自分から下手も積極的にうたったり、弾いたりして楽しむことが本当の音楽のよろこびを知ることである。

4. リズム表現

リズムフレーズの拍の流れ（リズムのまとまり）、音楽で使うフレーズとは、一つのまとまりを意味し、文章というならば句読点で区切られる文に相当する。

曲の中では、いくつかのリズムの動機がいくつか組み合わせさせて自然の音楽のまとまりを構成している。表現活動でもフレーズ感は重要な意味を持っている。

例1. 音楽に合わせてリズムフレーズ、リズムの流れ拍の流れを身体で感じる。

例1

白のま

上記のようなリズムフレーズが考えられる。このような、いろいろ異ったリズムフレーズに対する感覚を育てることができる。

前述に記したいろいろなリズムフレーズは、身体表現

例2

春がきた

のやりやすい曲を選ぶ。例えば、歩きやすい、拍感のはっきりした曲など又リズム唱、拍打ちなどが密着できるものを取り扱う。

このような方法でリズム唱、リズム打ちをとりながら拍とリズムの関係を自然な動きの中で身につけて曲を理解していく。

リズムと動き——リズムの基本的な考え方として、常に人間が呼吸している様にとまることがなく、動いていることである。例えば、歩いている時には左右両足は止ることなく動いているように、リズムも同じように動いているのである。

リズム打をする場合、動きを感じながら打つ方法でリズムをとるとリズムの流れと動きがはっきりしてくる。歩いている時の状態を体で感じながらリズム打ちをするとうまい。リズム、テンポなどは歩きながら歌うことによって正確なリズム、テンポで歌えるようになる。

歩くという動作は、無意識で自然で正確なリズムである。このように歩く運動に合わせてリズムの流れを感じとらせることにより曲の気分をより明確につかませることができる。

器楽、創造的活動、旋律の表現については次回に発表したいと思います。

付 記

本稿は第47回日本保育学会において発表したものを基にしたものである。なお本研究は平成四年度東京家政大学大学院（児童学専攻）開設にともなう特別研究費によるものである。